

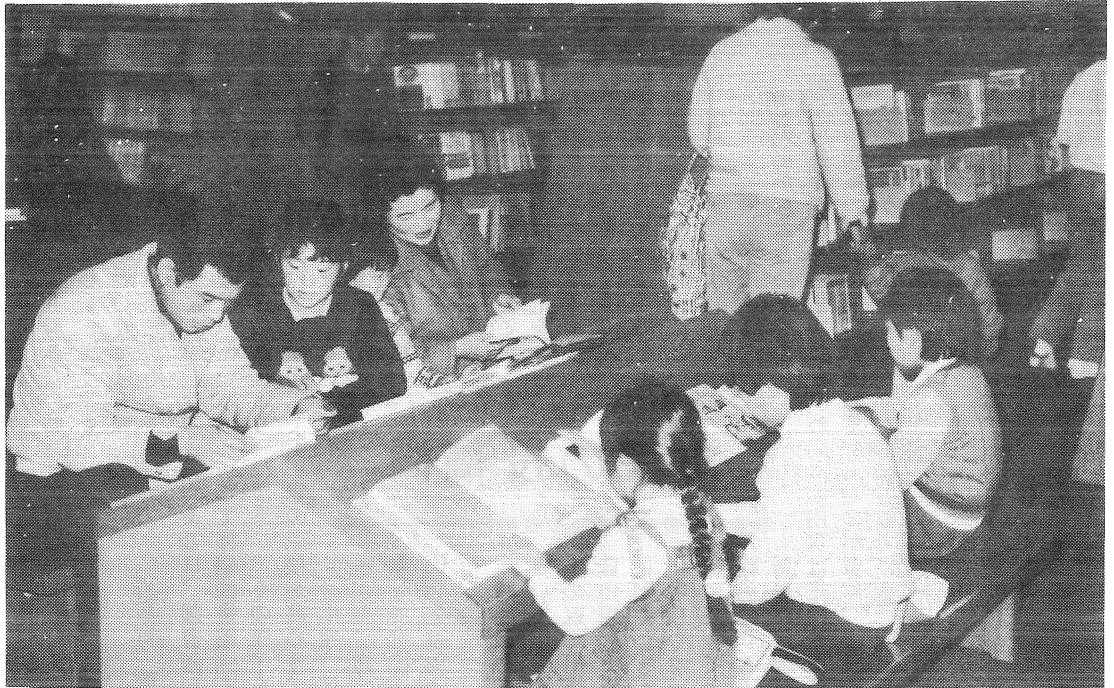
としょかん宇治

No. 8

1986年2月1日発行

宇治市中央図書館
宇治市文化センター内

〒611
宇治市折居台1丁目1番地
電話 (20)1511



賑わう中央図書館児童コーナー

宇治のことなら なんでもわかる場に

館長 五十嵐 一郎

宇治市文化センターは、伝統的文化を継承し、新しい文化を創造する拠点としてつくられたものであり、その一角を占める図書館も本を通じて市民の文化活動に寄与することが期待されているといえます。

図書館には資料提供、情報提供、教育機能、集会機能等種々の役割がありますが、図書館と文化とのかわりはこの点だと具体的に断定するものではありません。しかし文化とは人間の心の活動の成果であるとするならば、図書館はまさしく心の活動と深くかかわっており、日々文化活動をしているといえるでしょう。

開館以来、気軽に親しめる図書館をめざして、本の貸出しを中心とする資料の提供を重視し、一年間に四十万冊以上の本を、約十七パーセントの市民に貸出しました。

今後は貸出しを更にのばすとともに、市民が知りたい、調べたいと思うことにこたえる情報提供の充実、特に宇治のことなら社会生活全般のようなことにもこたえられる力をつけたいと考えています。

図書館の役割を一つ一つ着実にこなしていくことが、市民に信頼され、市民生活に欠かせない存在となることであると確信し、職員一同頑張っています。

あの本・この本

五ヶ庄 田中智子

本とは長いつきあいである。あの本、この本と思いの残る本が本棚に所狭しと並んでいる。その秘蔵つ子が生活空間をおびやかした。それでもなお、活字中毒でも云えるのだろうか、せっせと本を読んでいく。ああ炊事が、ああ洗濯が待っている。と思いつつ読まずにいられない。時に、何らかの益をもたらしてくれるのはほんの僅かであり、大部分のものは単なる時間の浪費にすぎないと自己嫌悪におちいることもあるがまたまた本に手を出す。どこへ行って大きな書店があると中を覗かずにはいられない。とりたててこれというものが見つからなくても、何かを手にして出てきてしまう。

わが家には五才の子がいる。最近、彼が自己主張をし始めた。狭い棚の一角を占有し、かつ拡大策をとりだした。手狭なわが家はあちこち本があふれ、片付かないことこの上ない。このままでは古本屋の女主人になってしまふ。なんとかなるにおさらばして、なんとかしなくっちゃ。そもそも、本というものに心を許しすぎた感がある。わが家のにさばっ

ている本は、一体、何なのか。

一読して、いつでも読みたい時に手元にあってほしいと思う本もある。楽しい時を過ごせたなど満足感を味あわせてくれる本もある。

単に時間つぶしだったと思わせる本もある。もちろん、一冊の本に對する評価はその人その人により異ってくるが、要は選択の問題である。そこで解決策として

まず書店を覗く回数を減らすこと、次に新刊書、話題の書をも閲覧でき、かつ一読し味わってみてから蔵書にするかどうか決めること

のできる図書館の利用をこころずることにした。また書店に入っても、今手に入

れておかないと悔むものということを念頭におくことにした。

じっと我慢の子である。

この世から本というものが全て姿を消してしまつたら、わたくし同様、無上に淋しい人も多いことと思う。

本を読むことが単なる楽しみの一つということよりも、無くてはならないことであるわたくしに、本とのめぐり合い、つきあい方を、あの本、この本が考えさせる今日のごろである。

「そよかぜ号」に乗ってみて

折居台 佐伯 けい子

ある日、図書館利用者の一人として移動図書館「そよかぜ号」に便乗し、その様子を垣間見る。図書

の点検が終わり、準備完了。サア出発。係員2名、運転手さん、約二千冊の図書を

乗せて町の中へ……。今日の行先は24カ所のステーションの一つ「大久保」。駐

車時間は一時間。自動車内という限られたスペースに本の返却用のカウンター、貸出用のカウンター、それ

に図書がぎっしり配架され、利用しやすいように大変便利にできている。図書には緑色のラベルが貼られ、真

新しい図書が目立つ。図書の内容は主婦や児童を対象としたものが多く、小説や絵本が大半を占めている。貸出冊数は一世帯20冊まで、貸出期間は一月である。15冊借りられた人に聞く。「一月の間に全部読めますか。」「私はパートで働いているのですが、夜、寝る前に時間のたつのも忘れて読んでいます。もちろん全部読

みますよ。感心する。他の人に聞く。「児童書をお捜しのようにですが、学校での図書館は利用していいのですか。」「学校の図書館も利用していますが、移動図書館も大いに利用しています。」成程、家族に代わって本を借りている人もいる。この地域での登録者数は43世帯。本日の利用者数は27世帯。かなりよく利用され、地域の人々の中に根強く浸透している。

また、ブックモバイルは本を媒介として、人々のコミュニケーションの場としての役割りも果たしている。今や教育問題となっているテレビやファミコン漬けになるよりは、一日たとえ30分でも読書をすることは、その分心が豊かになり、良書との出会いは人生における心の糧をもたらすはず。

幼児期における親子での絵本との語らひは何事にも代えがたいものである。

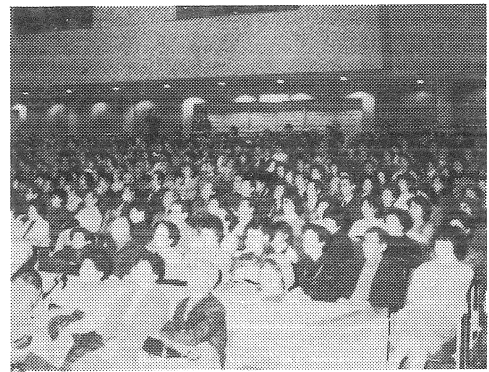
自分が読みたい本や揃えてほしい本はリクエストし、予約しておけばよい。現在、移動図書館用の蔵書は約二万冊あるが、冊数を増やし、ゆくゆくはコンピュータ化し、利用者への便宜をはかっていることが望まれる。

「そよかぜ号」は夢と希望を乗せて今日も走り続けるのである。

梅原猛氏 古典に登場する宇治を語る！

昨年十二月十四日(土)午後二時より、宇治市文化センター大ホールにて、宇治市文化センター開館一周年記念講演会が、梅原猛氏を講師に催されました。十二時半の開場と同時に入場者はつめかけ開演時にはホールをほぼ埋めつくす千三百人余の市民の方を教えました。

五十嵐図書館長の司会で定時にはじまり、池本市長の挨拶、谷岡宇治市文化センター総館長の紹介で登場された梅原氏は、日本の代表的な古典といえる「古事記」・「万葉集」・「源氏物語」と宇治



についてユーモアをまじえて講演されました。「古事記」より菟道和郎子と大山守命の王位継承をめぐる争い。そして、二人とも悲劇となった。「万葉集」より柿本人麿。宇治川の激しい流れのなかに自らの人生をみたのではないか。「水底の歌」での晩年が浮びくる。また、「源氏物語」より、宇治十帖のヒロイン浮舟。かよわくも激しい恋。そしてヘミングウェイの文学のような美しくも悲しい別れ。一時半あまりの講演でしたが、古代の宇治のロマンによったひとときでした。

【質問】 宇治市の『市の木』・『市の花』はどのように決められたのですか。

【回答】

『市の木』はモミジ(イロハモミジ)です。春夏の緑、秋の紅葉が宇治川沿いの山谷を彩る美しさから選ばれました。

『市の花』は山吹です。山吹の里、春岸の山吹、琴坂の山吹など宇治には山吹の名所も多く、茶とともに結びつきも深いとして選ばれました。いづれも市民からの応募も最も多かったものです。

なお、茶の木は宇治にとってなくてはならない宝の木であるとして『市の宝木』と決められています。

ご存知ですか？

【質問】

図書館の本は、誰がどのようにして選んでいるのですか。

【回答】

図書館には人と本を結びつける仕事をする専門職(司書)がいます。現在、六名の司書が書店から毎週送られる新刊図書案内を中心に、カウンターでお聞きする「こんな本が読みたい」「こんな事を知りたいのですが...」の声や新聞・雑誌等の書評を参考に小説・趣味を生かすもの、日常生活に役立つもの、教養を高めるもの、軽易な調べものが出来るもの、読書の喜びを与える児童書等、幅広い層の人達の要望に応えられる本を選び、館長の決裁を得て、購入しています。

また、月に一回、選書会議で、本の利用状況等を検討し、毎週の選択で選べなかった本や手薄になっている分野の充実をはかっています。リクエストを含め月に約七百冊余の本を選択しています。その他、取次店にだけ、直接本を手にして選ぶこともあります。『図書館でこんな本を借りてよかつたなあ』『いい本と出会えたなあ』と思っただけの図書ができるだけ購入し、あなたの身近かな書齋として、活用していただけることをめざしています。



昭和五十五年十一月、市長から諮問を受けた「宇治市市の木、市の花選定委員会」では、一誰にも知られ親しみやすい、市の歴史・伝説・文学等と関係が深い、市民生活と結びつき、都市化・美化に役立つ——などを基準に審議し、昭和五十六年二月に答申、市では答申の内容をうけて検討、三月一日の市制記念日に制定されました。

(洛南タイムス 昭和五十六年二月五日号を参考にしました)

郷土のはなし

御茶壺道中

御茶壺道中は、徳川家康が宇治の上林家に命じて朝廷の献上茶と將軍家直用の茶をつくらせ、それを役人に運ばせたのに始まるといわれています。

毎年新茶の季節、東海道五十三次を宇治から江戸まで、はるばる新茶を運ぶ御茶壺道中として制度化されたのは、徳川三代將軍家光の時代、寛永十年からとされています。

そもそも幕府の威光を諸大名とともに庶民に誇示するために始められた華麗で盛大な道中であっただけに、途中で行き逢う庶民はむろん、諸大名も道を開けねばなりませんでした。

將軍家直用の新茶を運ぶ高い位の行列は、権威による横暴と庶民への圧政となり、

茶壺に追われて

トツ(戸を)ピッシャン

(通り)抜けたら

ドンドコシヨ……

と童唄にはやされ、庶民から迷惑

がられました。

宇治では、毎年製茶の季節を迎えると、「御物御茶つぽ出行無之内は新茶出すべからず」という高札がかかげられていました。この行事のすまないうちは、どんな理由があっても宇治茶ののつみ出しは許されませんでした。

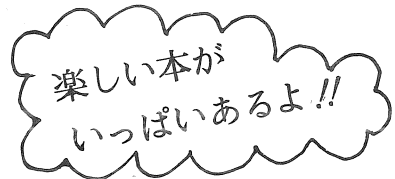
御茶壺道中は、毎年旧暦の四月下旬から五月上旬のうちに江戸を発ち、宇治へ向かいました。茶壺の数や人数は年によって多少の増減はありましたが、最盛期には百個以上の茶壺を、人足千百人、馬百六十頭に運ばせる大行列でした。お茶献上の榮譽と緊張の茶師はもとより、宇治の家々は、茶壺の到来を、それぞれ手桶に水を満たして火災に備え、内外を清掃してその日を迎えたいといっています。

ともあれ、將軍家御用の茶をとり扱うという宇治だけのもつ栄光は、幕府の保護政策もあって、「茶は宇治」のものという名声を広めていきました。

御茶壺道中をぬきにして、宇治の茶業を語ることは出来ないといえるでしょう。

〔参考文献〕

- ・「宇治市史」第三巻 宇治市
- ・「御茶壺道中記」井六園



児童書・テーマ別展示

児童コーナーでは、昨年から二カ月ごとに、主題別に図書を集め、展示と貸出を行っています。これは子供たちに、読書の意欲を高め、図書館に親しんでもらうことを主な目的としています。そのため、季節にちなんだものや、子供たちの興味をひきそなう主題を選び、子供たちと本との結びつきを確かなものにしていきたいと考えています。二月中は「雪」の本を展示し、以後の予定は、「がっこう」「のりもの」です。ご利用をお待ちしています。

中央図書館利用案内

- * 宇治市内にお住まいの方
 - * 市内に通勤・通学されてる方ならどなたでもご利用いただけます。
 - * 本は、
 - ・ 一人三冊 以内
 - ・ 三週間 かりられます。
 - * 休館日は次のとおりです。
 - ・ 毎週月曜日
 - ・ 毎月末日
 - ・ 国民の祝日
 - ・ 年末年始
 - * 開館時間は、年間をとおして
 - ・ 九時～十七時
- までです。

編集後記

「春は名のみの風の寒さや…」(早春賦)。南の国からは桜の便りが聞かれますが、こちらではまだ、頬にあたる風も冷たく、本格的な春はもう少し先のようにです。今回から新しく、『ご存知ですか?』のコーナーを設けました。図書館のことについて、また、日頃疑問に思っておられることなど、ご質問に答える形でわかりやすくふれていきたいと思っています。ご意見・ご希望があればお寄せ下さい。新しい本もたくさん入っています。これからのあなたの読書計画に図書館をぜひご利用下さい。